

## ナアマン

2007. 7. 10 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

### 引用聖句

列王記・第二 5章1節から14節

アラムの王の将軍ナアマンは、その主君に重んじられ、尊敬されていた。主がかつて彼によってアラムに勝利を得させられたからである。この人は勇士ではあったが、らい病にかかっていた。アラムはかつて略奪に出たとき、イスラエルの地から、ひとりの若い娘を捕えて来ていた。彼女はナアマンの妻に仕えていたが、その女主人に言った。「もし、ご主人さまがサマリヤにいる預言者のところに行かれたら、きっと、あの方がご主人さまのらい病を直してくださるでしょうに。」それで、ナアマンはその主君のところに行き、イスラエルの地から来た娘がこれこれのことを言いました、と告げた。アラムの王は言った。「行って来なさい。私がイスラエルの王にあてて手紙を送ろう。」そこで、ナアマンは銀十タラントと、金六千シェケルと、晴れ着十着とを持って出かけた。彼はイスラエルの王あての次のような手紙を持って行った。「さて、この手紙があなたに届きましたら、実は家臣ナアマンをあなたのところに送りましたので、彼のらい病から彼をいやして下さいますように。」イスラエルの王はこの手紙を読むと、自分の服を引き裂いて言った。「私は殺したり、生かしたりすることのできる神であろうか。この人はこの男を送って、らい病を直せと言う。しかし、考えてみなさい。彼は私に言いがかりをつけようとしているのだ。」神の人エリシャは、イスラエルの王が服を引き裂いたことを聞くと、王のもとに人をやって言った。「あなたはどうして服を引き裂いたりなさるのですか。彼を私のところによこしてください。そうすれば、彼はイスラエルに預言者がいることを知るでしょう。」こうして、ナアマンは馬と戦車をもって来て、エリシャの家の入口に立った。エリシャは、彼に使いをやって、言った。「ヨルダン川へ行って七たびあなたの身を洗いなさい。そうすれば、あなたのからだ元どおりになってきよくなります。」しかしナアマンは怒って去り、そして言った。「何ということだ。私は彼がきっと出て来て、立ち、彼の神、主の名を呼んで、この患部の上で彼の手を動かし、このらい病を直してくれると思っていたのに。ダマスコの川、アマナやパルパルは、イスラエルのすべての川にまさっているではないか。これらの川で洗って、私がきよくなれないのだろうか。」こうして、彼は怒って帰途についた。そのとき、彼のしもべたちが近づいて彼に言った。「わが父よ。あの預言者が、もしも、むずかしいことをあなたに命じたとしたら、あなたはきっとそれをなさったではありませんか。ただ、彼はあなたに『身を洗って、きよくなりなさい。』と言っただけではありませんか。」そこで、ナアマンは下って行き、神の人の言ったとおりに、ヨルダン川に七たび身を浸した。すると彼のからは元どおりになって、幼子のからだのようになり、きよくなった。

今読んでくださった箇所こそ、「喜びの知らせ」なのではないでしょうか。

この素晴らしい救いにあずかるようになったのも、今読みましたナアマンという男です。これは、みなさんが何度も読んだ箇所ですから、未信者のために最適な書ではないか、と思う方もいるかも知れませんが、実は信じる者のためにも有益な教えが含まれています。

私たちはずっと「エリシャ」について学んできましたが、「エリシャ」を学ぶだけではなく、「主のよみがえりの力」も、同時に学び取りたいものです。エリシャは「よみがえりのいのちの力」を持っていたので、エリシャの生活は私たちにとって非常に大切です。

この書で、まずナアマンという名前の人を覚えましょう。

三つの点をいっしょに考えてみたいと思います。

第一番目。ナアマンが試みたむなししい救いの努力。

第二番目。救いの本質とは何か。

第三番目。ナアマンが味わった偉大な体験。

1. まず、ナアマンが試みたむなししい救いの努力について考えてみたいと思います。

列王記・第二 5章1節

アラムの王の將軍ナアマンは、その主君に重んじられ、尊敬されていた。主がかつて彼によってアラムに勝利を得させられたからである。この人は勇士ではあったが、らい病にかかっていた。

つまり、イスラエルの民は主に対して聞く耳を持っていませんでしたので、イスラエルは負けてしまいました。このナアマンは、「主の道具」になったのでした。それは未信者として、偶像礼拝する者として主は彼のことを用いられたのです。彼は、名誉・地位・権力・功績も多いといった恵まれた男でした。彼は、人望、立場、権力、功績、これらすべてを兼ね備えていましたが、ナアマンの命にはもうすでに死が働き始めていました。

死は、能動的です。働きかけます。死はその環境を支配します。ですから、ナアマンの立場、功績などは何の役にも立ちませんでした。ナアマンが今持っているものは、今だけはそこにありますが、間もなく消え失せてしまうのです。

このナアマンは、いわゆる生まれながらの人の見本なるものです。あらゆる力、手柄を持っていたにもかかわらず、死が働いていました。らい病は聖書のどこを見ても罪を象徴しています。そして、この罪は聖なる神と罪人の間を大きく隔てていると言っています。

人間は罪を見逃しにしてしまいます。「大したものではない」と言います。「罪が無い」などと馬鹿らしいことも人間は言います。けれど、罪が存在し、この罪が人間を神から隔てているという事実は、認めても認めなくても、あくまで事実です。

ナアマンは、らい病の最初の兆候が表われたとき、それを誰にも言わず、きれいな着物の下に隠していたことでしょう。彼はその小さな斑点を見て、「これは小さい。こんな問題は大したことではない」と考えたことでしょう。けれども彼は、自分はいび病であることを知っていました。また、彼はこの病気のゆえに自分の持っている地位、名誉、功績などは全然価値がないものであることをも知っていたのです。

このナアマンが心からの幸福を得たいと思うなら、彼は自分のらい病を治さなければなりませんでした。新しい、解放されたいのちを持ちたいなら、この病が治らなければなりません。

私たちの場合もこれと同じです。主なる神との交わりを持つようとするならば、まず罪の問題を解決しなければなりません。その第一歩は自分が罪人であることを認めることです。もし、私たちが国々の間で起こっている出来事、また、東京だけで起こっているいろいろな出来事、家族の間で見られる種々な出来事、また、個人個人の生活などをよく観察するならば、だれでもが罪人であることは明らかです。

もし、これらの事実に向かうならば、「私たちは救われるためにどうしたら良いのでしょうか」と叫ばざるを得ないでしょう。

立場、名誉、功績を兼ね備えているナアマンは、自分の病を癒すためにあらゆる方法を試みたに違いありません。薬もあったでしょうし、もちろん医者もいました。偶像もあり、あらゆる宗教もありました。いずれを試みてもむなしかったのです。それは絶望的な状態でした。らい病を治そうとする努力は、全くむなしいものでした。

しかし、ひとりの若い娘が奴隷としてナアマンのもとで働いていました。彼女はイスラエルの生けるまことの神を信じ恐れる者で、外国でも自分の信じる主なる神を証したのです。自分の信仰を隠そうとしなかったのです。

アラム、すなわちシリアは、神の国であるイスラエルにとっては敵国でした。今日までそうなのです。けれども、それと関係なく、彼女はナアマンに対して同情の心を寄せていました。彼女は、偉大な主なる神のみわざを告げ知らせました。彼女は主の預言者であるエリシャが行なった数々の奇蹟も告げ知らせたでしょう。「エリシャの助けを乞いなさい」と彼女は言ったのです。

そして、彼女の忠告は主人であるナアマンに取り上げられたのです。どうしてでしょうか。彼女の証しが立派だったからです。若い娘は言いました。「ああ、ご主人様がサマリヤにいる預言者とともにおられたら良かったでしょうに。彼はそのらい病を癒したことでしょう」。違う言葉で言えば、「ご主人様、あなたは主なる神に用いられている人、すなわち、エリシャに会えば良いのですが…」という意味です。

それまでナアマンは、いろいろな薬、医者、また人から出た宗教などに頼っていました。彼は、いったいどうしたらこの病が癒されるのだろうとそればかり考え、願っていたので、大きな贈り物を持ってエリシャを捜しに出掛けました。

ナアマンは、自分の病気が容易ならぬものであることをはっきりと知っていました。けれど彼は、主を知らない異邦人であり、生まれながらの人でした。ですから、彼は自分の身分、自分の手柄の高さ、大きさをエリシャに知らせたかったのです。ナアマンは、名誉、地位を持っていました。彼はそれをエリシャの前で見せびらかしたかったのです。

彼は、高価な贈り物とともにエリシャのもとにやってきました。そして召し使いを遣わし、自分が訪れることを前もって知らせました。礼儀正しく。

その時エリシャはどうしたでしょう。エリシャは、この名誉と地位のある男はいったいどのような人かと見に行くことをしなかったのです。このナアマンに会おうとしなかったのです。

列王記・第二 5章9節から12節

こうして、ナアマンは馬と戦車をもって来て、エリシャの家の入口に立った。エリシャは、彼に使いをやって、言った。「ヨルダン川へ行って七たびあなたの身を洗いなさい。そうすれば、あなたのからだは元どおりになってきよくなります。」しかしナアマンは怒って去り、そして言った。「何ということだ。私は彼がきつと出て来て、立ち、彼の神、主の名を呼んで、この患部の上で彼の手を動かし、このらい病を直してくれると思っていたのに。ダマスコの川、アマナやパルパルは、イスラエルのすべての川にまさっているのではないか。これらの川で洗って、私がきよくなれないのだろうか。」こうして、彼は怒って帰途についた。

「ダマスコの川」とは、つまり、自分の国の川です。

当然です。けれども、これこそいわゆる「十字架のつまずき」です。多くの人は、教会で名誉を自分のものにすることができるなら、教会へ行くでしょう。けれど、主なる神の備えられた救いの道は、「十字架」です。聖書ははっきり言っています。すなわち、人間が十字架からほんの少し外れても救いは絶対がない、と。

ですから、パウロはある時から決心したのです。「私は十字架につけられたキリストよりほかのことを宣べ伝えない」と。

もし、私たちが十字架のみもとに行くなら、私たちの持っているあらゆる名誉、地位、財産を捨てなければなりません。生まれながらの人は、十字架のみもとにとどまり続ける犠牲を払うことはできません。

ヨルダン川は、みなさんご存じのようにイエス様の十字架の象徴です。ナアマン将軍がヨルダン川へ行くということは、将軍が自分の持っているあらゆる名誉、地位を捨て去ることを意味していました。

ヨルダン川の水は、生まれながらの人に対する、主なる神のさばきを象徴しています。ナアマンに対するエリシャの態度は、結局、主なる神が人間一人一人に対する態度です。主なる神の御前では、名誉、地位、成功、これらは何の役にも立ちません。

ナアマンはそれを聞いたとき、非常に立腹しました。社会人として成功し、年配になった人があまり集会に来ないということは、確かにこのことも一つの理由です。なぜなら、年配者が集会に来て主に出会うと、それまでの生活が全く無意味であり、的外れのものであったことを認めざるを得ないからです。

ナアマンは癒されるために何をしようとしたのでしょうか。私たちは、救われるために何をしたらよいのでしょうか。

これらの質問に答えるために、ほかの設問をしましょう。

2. 救いの本質とは、いったい何でしょうか。

答えは使徒行伝 16 章に書かれています。みなさんよくご存じの箇所ですが、もう一度お読みいたします。

使徒の働き 16 章 19 節から 34 節

彼女の主人たちは、もうける望みがなくなったのを見て、パウロとシラスを捕え、役人たちに訴えるため広場へ引き立てて行った。そして、ふたりを長官たちの前に引き出してこう言った。「この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。」群衆もふたりに反対して立ったので、長官たちは、ふたりの着物をはいでむちで打つように命じ、何度もむちで打たせてから、ふたりを牢に入れて、看守には厳重に番をするように命じた。この命令を受けた看守は、ふたりを奥の牢に入れ、足に足かせを掛けた。真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。ところが突然、大地震が起こって、獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みな鎖が解けてしまった。目をさました看守は、見ると、牢のとびらがあいているので、囚人たちが逃げてしまったものと思い、剣を抜いて自殺しようとした。そこでパウロは大声で、「自害してはいけません。私たちはみなここにいる。」と叫んだ。看守はあかりを取り、駆け込んで来て、パウロとシラスとの前に震えながらひれ伏した。そして、ふたりを外に連れ出して「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」と言った。ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言った。そして、彼とその家の者全部に主のことばを語った。看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、その打ち傷を洗った。そして、そのあとですぐ、彼とその家の者全部がバプテスマを受けた。それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ。

このピリピの獄吏は、「救われるために」と。(「いい人になるために」ではありません。)  
「救われるために何をしなければなりませんか」と叫んだのです。

この疑問の叫びから一つのことばを取り出して、考察してみたいと思います。

・「私は」ということばです。「私は、救われるために、何をすべきでしょうか」。

ここで言っている「私は」とは、誰でしょう。この「私」は、失われている人であり、罪、悪魔、自己の奴隷です。彼は、主なる神を見ることのできない盲人でした。霊的に死んだ者でした。主なる神から出るいのちから遠く離れていた者でした。

私たちがナアマンを見れば、「霊的な死」とは何かはひと目で分かります。「霊的な死」とは、何でしょう。霊的な死とは、生まれながらのいのちをもち続けていることです。

普通の人間にとっては、ナアマンのいのちは本当に立派なものでした。一般の人の目から見れば、ナアマンはほめたたえるに十分価値ある人だったのです。ナアマンの生活は、

成功していました。そしてまた、彼は力を持っていました。けれど、ナアマンは全てを持っていたにもかかわらず、残念なことに「霊的な死」までも持っていたのです。霊的に死んでいたのです。つまり、らい病人だったからです。

ピリピの獄吏が救われたとき、彼は自分が罪人であることを認めました。ナアマンは癒されたとき、自分が恐るべき病人だったことをはっきり知りました。

もし救われたいと思うなら、自分は、自分が失われている者であり、「盲目」であり、「奴隷」であり、また、「霊的に死んでいる者」であるという事実を避けてはなりません。

・次に考察したいことばは、「救われる」ということばです。「私は、救われるために、何をすべきでしょうか」。

獄吏は、「私は、良い人間になるために、何をすべきなのでしょうかと、叫んだものではありません。「私は、救われるために、何をすべきなのでしょうかと」。

獄吏は、「私は、いかにしたら、奴隷の身から解放されるのでしょうか。私は、『目しい』の身から、『目あき』の身になることができるのでしょうか。私は、『死の様』から『生きる』ことができるのでしょうか」と。

・三番目のことばは、「なす」ということばです。「する」ということばです。「私は、救われるために、何をなすべきでしょうか」。

鎖で縛られた奴隷が自分の身を自由にするのに、何ができましょう。盲人が見えるようになるために自分で何ができましょう。死人が自分で生きることがどうしてできましょう。絶対に何もできません。

そうすると、救いの本質とはいったい何なのでしょうかと。三つのことが言えます。

・第一番目。まことの救いは、主なる神の満足される十分なる救いでなければなりません。人間がいかにしてだれによって救われるかは、主なる神のみが知っておられます。

獄吏は、自分の身を救うために、自分の道へ行くことは赦されなかったのです。ただ、『主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます』。獄吏はこのことばによって導かれ、救われました。

ナアマンは自分の故郷の川で水を浴びることにより、その病を癒すことを赦されませんでした。「あなたはヨルダン川へ行って、七たび身を洗いなさい」と言われるばかりでした。

同様に、私たちも自分の救いのために自分勝手な道を選ぶことはできません。私たちの救いの道は、十字架です。

・二番目。まことの救いは、罪とともに罪の結果も消滅してしまうような、完全な救いでなければなりません。救いは、人の罪を消し去り、その人に新しいいのちを与えるものでなければなりません。

獄吏の場合も、心の罪が赦され、獄吏のうちに新しい創造が信仰によってなされなければならなかったのです。

ナアマンの病気も、ヨルダン川で身を洗い、癒され、ナアマン自身が新しい人間にならなければなりません。

私たちの罪も、十字架で贖われ、私たちのうちに新しい創造が始められなければなりません。

・三番目。救いとは、罪に対してなされた死刑の執行でなければなりません。

主なる神は、「一度罪を犯したたましいは必ず死ぬ」と言っておられます。罪の刑罰を受けなければなりません。刑罰は執行されなければならないのです。

獄吏は、イエス様の身代わりの死を信じました。ナアマンは、死の川、ヨルダン川に下りて行きました。私たちが主の救いを自分のものにしようと思うならば、十字架のもとに来なければなりません。

3. 最後に第三番目。ナアマンが味わった偉大な体験とは、いったいどういうものだったのでしょうか。

「ヨルダン川へ行って、七たび身を洗いなさい」と。ナアマンは初め、非常に腹を立てましたが、あとでもべたちと語り、今ある問題は生か死の問題であることを悟り、ヨルダン川へ行ったのです。「七」という数は、「霊的な完全さ」を意味しています。この物語を読むと、ナアマンはヨルダン川に一度だけ身を浸したと書いてありません。また、三たび身を浸して諦めてしまったとも書いてありません。

ナアマンは言いました。「これが私の救いの道であるなら、私は無条件に行きます」と。なぜなら、生きる屍のままに故郷に帰るよりはましであるからです。

ナアマンは、ヨルダン川に二度だけ身を浸して、何も起こらない、相変わらずらい病は治らない、「初めに考えたとおりに」などとは言いませんでした。ナアマンは、一度、二度、三度と、六度まで身を洗いました。しかし何も起こりませんでした。それにもかかわらず、ナアマンは最後の目標を目指して七たび身を浸しました。ナアマンの信仰は最後まで試みられました。

ナアマンが七たび身を浸すと、らい病が治ったばかりでなく、ナアマンの肉体は幼子のようによくなった、とあります。この幼子の肉体は、「新しい創造」、「新しいいのち」を意味しています。今や、ナアマンの生活は全く新しいものとなりました。彼の前に新しい世界が広がりました。

彼は、主の示された道を歩きましたから癒されたのです。ナアマンの癒しは、らい病が癒されたばかりでなく、「新しいいのち」が与えられたのです。

ヨルダン川へ入ることによって、ナアマンに対する死刑が執行されました。

この物語は、未信者に対して救いの道を示しているばかりでなく、信じる者にとっても本当に大切なのではないかと思います。

十字架は、罪人に救いを知らせているだけでなく、信者たちに自分の持っているものは全く役に立たないものであることを教えています。すなわち、自分の意志、自己、興味、

目的、力、考え、感じる事、これらは信仰生活の重荷であり、妨げです。

エリシャはナアマンが来たとき、ナアマンを窓から覗いて見ようとしなかったのです。これは主なる神の態度です。私たちの肉、すなわち、私たちの志す事、興味、力は、主の憎むところのものです。これがヨルダン川の意味です。これが「十字架」の意味です。

ナアマンは最初、ヨルダン川に行って身を洗っても仕方がないと思っていました。しかし、彼は「無条件」にヨルダン川に入り、「解放された新しい人」になったのです。

信じる者として私たちは、「主のいのち」、すなわち、「永遠のいのち」を持っていますが、私たちはますます、「主の満ち満ちたいのち」に支配されなければなりません。そのために必要なのは、自分の「自己を捨てる」ことです。なぜならば、自分の意志と主のみこころとは対立しているものであるからです。

私たちは、好きな罪をしっかりと握ったままでいるのでしょうか。自分の立場、地位を捨てて、主とともに前進しようではありませんか。私たちが「よみがえりの力」を自分のものとするために、自分の感じや、考えを捨て去りましょう。

私たちは、信じれば信じるほど主の力を多く持つようになります。ナアマンは七たび、ヨルダン川に身を浸しました。信仰によって最後の回まで身を浸しました。

ナアマンと同じように、「信仰によって」最後まで進んで行くことは、非常に困難なこともかもしれません。今まで自分は正しいと思い込んでいた意見を全部捨てなければならぬからです。

前進する一步一步は、ますます多くの信仰を必要とします。しかし、これがいのちの道であり、成長の道でもあります。主とともに一歩前進するならば、ナアマンの場合と同じように、新しい世界が切り開かれます。

ナアマンの生活の、三つのことが突然変わりました。ナアマンの、

第一番目。エリシャに対する態度。

第二番目。主なる神に対する態度。

第三番目。自分の財産に対する態度

が変わったのです。

・第一番目。主が用いられた人エリシャに対する、ナアマンの態度が全く変わったのです。

以前ナアマンは、エリシャに対して非常に立腹し、そのまま帰ってしまおうとしました。彼は今や、主に用いられた人エリシャと、交わりを持ちたく思ったからです。もはやおのれを高くすることなく、エリシャと交わろうとしたのです。どうしてでしょうか。

それは、ナアマンが新しいいのちをいただき、エリシャがエリヤから得たと同じように、「よみがえりのいのち」を持ったからです。エリシャは、ナアマンとともにヨルダン川を渡ったからです。

同じいのちは「交わりの基礎」です。したがって、信じる者の間には年齢や職業による差別は全くないはずで、すなわち、聖書は信者と未信者の結婚を忠告しています。「同じいのち」のないところには、交わりもあり得ないからです。



・二番目。ナアマンの態度は、主に対する崇拝に変わりました。

ナアマンは主を拝し、言いました。「私は今、イスラエルのほか、全地のどこにも神がおられないことを知りました」。ナアマンは生ける唯一の主なる神を知りました。ですから、その神を崇拝したのです。たとえ人が聖書の教えを受け入れたとしても、その人が主を崇拝するとは限りません。また、たとえ人が集会に来て出席し、洗礼まで導かれたとしても、その人が主を崇拝するとは限りません。

しかし、人がいったん「よみがえりの力」を経験すると、その人は主を崇拝し、ただただおのれをささげるようになります。これが「本当の証し」です。私たちのする証しは、語ることでなく、一つの教えでもなく、「主ご自身」です。主のよみがえりの力を知った人は、主を崇拝する崇拝者です。

・そして第三番目。ナアマンは態度を変えて、主に贈り物をささげようとなりました。

主はナアマンの財産に対する権利も持つに至られたのです。もし、私たちが本当に主を信じているならば、私たちは心からなる感謝を主にささげるはずです。もし、私たちが新しいのちを持っているならば、主は、私たちの持てるもの全ての上に権利を持っておられるのです。

しかし、エリシャは贈り物を受け取りませんでした。「いりません」と。どうしてでしょうか。エリシャは、この前のやもめのもとでは贈り物を受け取りました。しかし、ここではナアマンから贈り物を受け取ろうとしなかったのです。それは、やもめとナアマンの間に霊的な違いがあったからです。

もしエリシャがナアマンから贈り物を受け取ったなら、ナアマンは自分の体を癒すために、自分も何か役割を演じたのだ、と思ったかもしれません。主はそのような考えを非常にお嫌いになりますから、エリシャは贈り物を受け取らなかったのです。

次に、エリシャのしもべゲハジに関する、悲しむべき出来事が起こりました。ゲハジというしもべは、ナアマンの身に起こった奇蹟を見聞きし、またナアマンが故郷へ向かったことを知りました。そして、このゲハジは故郷へ向かうナアマンのあとを追って行き、追いつき、ナアマンに長い偽りの話を話しました。そしてゲハジは、ナアマンがエリシャに贈るために携えてきた贈り物を自分のものとしたのです。けれどもこれにより、ゲハジは恐るべき刑罰を受けました。

列王記・第二 5章27節

「ナアマンのらい病は、いつまでもあなたとあなたの子孫とにまといつく。」彼は、エリシャの前から、らい病にかかって雪のように白くなって、出て来た。

とあります。これはいったい何を意味しているのでしょうか。

もう一箇所、最後に読んでみましょう。

ルカの福音書 4章27節から30節

「また、預言者エリシャのときに、イスラエルには、らい病人がたくさんいたが、そのうちのだれもきよめられないで、シリア人ナアマンだけがきよめられました。」これら

のことを聞くと、会堂にいた人たちはみな、ひどく怒り、立ち上がってイエスを町の外に追い出し、町が立っていた丘のがけのふちまで連れて行き、そこから投げ落とそうとした。しかしイエスは、彼らの真中を通り抜けて、行ってしまわれた。

ゲハジは、エリシャから教えを聞き、奇蹟を見ました。また知識を持っていましたが、経験を持っていなかったのです。イスラエルの民も、イエス様の教えを聞き、イエス様のなされた奇蹟を見ましたが、心を頑なにしておき、明けて渡そうとしなかったのです。

イエス様は当時のユダヤ人たちに、「汝らはわたしのことばを聞いた。また、いのちの交わりを持った。わたしのわざを見た。汝らは多く知っている。しかし生きた経験を持っていない。したがって、汝らに対する刑罰は死であり、らい病である」と言われました。

これが、こんにちにまで及んでいるイスラエルの民の運命そのものです。

ゲハジは、頭の中に知識は蓄えていましたが、「よみがえりの力」を持っていなかったのです。やもめの息子が死んだとき、エリシャはゲハジに、「息子の上に杖を置きなさい。そして子どもを生き返らせなさい」と命令しました。ゲハジは子どもの顔の上に杖を置きましたが、生き返りませんでした。死人は死んだままでした。けれど、よみがえりの力を持っていたエリシャがやって来たとき子どもは生き返りました。

ユダヤ人の指導者たちも、イエス様を見聞きしましたが、自分の栄光のみを求めましたので、ゲハジと同じように、のろいのもとに置かれたのです。すべてのことを見聞きし、知ることができますが、たとえそうであっても、内側が空っぽの場合もありうるのです。

イエス様はご自分のよみがえりの力をもっとよく知るように、私たちに呼びかけておいでになります。私たちが自分の興味、自分の考えを捨てるなら、イエス様をもっともっとよく知ることができ、「よみがえりの力」を自分のものとすることができます。死なくしていのちはあり得ません。損失なくして得ることはできません。

パウロは次のように祈って、心から願ったのです。すなわち、「私はキリストとその復活の力をよりよく知りたい」と。

ナアマンは、みこころにかなう礼拝者になりました。

列王記・第二 5章15節後半

「私は今、イスラエルのほか、世界のどこにも神はおられないことを知りました。…」

17節後半

「しもべはこれからはもう、ほかの神々に全焼のいけにえや、その他のいけにえをささげず、ただ主にのみささげますから。」

と言ったのです。これこそ素晴らしい奇蹟なのではないでしょうか。

了